



ロシアによるウクライナへの侵攻開始から約2ヵ月。原油高や物価上昇など、私たちの生活にも影響していることを実感する。また、将来の幹部自衛官を養成する防衛大学に

おいて、卒業生の「任官拒否」(任官辞退)が過去の番目に多いと報道されたが、今回の事態の影響を否定できないのではないかと。

未だ多くのウクライナ市民が危険にさらされ、子連れで避難する人々、犠牲になっている人々の姿に胸が痛む。ロシアの武力行使を容認できない。

一方、なぜロシアは軍事侵攻に至ったのか、その背景で何が起きているのか、本質を見極める必要がある。それは、東方拡大を続けるNATO(北大西洋条約機構)がロシアにとって大きな脅威となっている点にある。NATOは、ソ連などの東側諸国に対抗するために作られた軍事同盟で、発足時の加盟国は米国など12カ国であった。しかしソ連解体に伴い東側諸国は相次いでNATOに加盟し、30カ国にまで拡大している。

ロシアとしては、親戚とも言える旧ソ連の国々が次々にNATOに加盟し、強大な軍力でロシアに近づきつつある現状を食い止めたい。そこで緩衝地帯とも言えるウクライナに対し、NATO不加盟を再三にわたり要求していた。しかし、ウクライナがNATO加盟方針を鮮明にしたことがロシアを軍事侵攻に踏み切らせたことを見ることが出来る。

ウクライナが中立の立場を示すのか、ロシア軍が戦費や経済制裁の影響で撤退するのか、どちらかが手を引かなければ終結しない。しかし、子ども

ウクライナ侵攻を端に、円安・物価高・軍事費増や改憲議論など起きている事態の本質を見極め、何をなすべきかを考えよう!

私たち市民、西国軍人の命が奪われている現実を見れば、どちらの国の論理が正しいか、という点にはならない。また、経済制裁によりロシアからの輸入を封じたことで、アメリカによる穀物や液化天然ガスの売り込みが始まり、巨大特需を得る者がいる裏側も見逃してはならない。

JR東労組は、戦争とは権力者や支配者の利益のために行われること、そして犠牲になるのは市民・労働者であることを学んできた。テロにも戦争にも反対であり、武力行使と侵攻に断固抗議する。奇しくも5月15日に沖縄は米軍の占領から本土復帰して50年を迎えるが、同じ過ちを繰り返してはならない。しかし日本はこの機とばかりに「今の憲法で本当に国民の生命と財産が守れるのか」と危機感をあおり、核共有や防衛費増の必要性を訴え、憲法改正の議論を進めようとしている。これが進めば中国や北朝鮮、韓国の警戒心を高め、緊張状態が高まりかねない。

5月3日は憲法記念日。日本国憲法の基本原則は民主権、基本的人権の尊重、平和主義である。核武装を含め、武力では解決しないことはウクライナ紛争をみれば一目瞭然であり、聞こえのよい言葉や世論に流され、騙されてはならない。先の総選挙で衆議院の4分の3が改憲派となった。このままでは力任せの議論や採決によって日本も「戦争のできる国」になり、ウクライナのような光景が現実となる可能性を否定できない。そうさせないためには政治に関心を持つこと、そして職場で価値観を出し、行動することである。いくら無関心でも影響は私たちの生活にまがいがなく及ぶ。今夏が日本の分岐点。今こそ一人ひとりが政治に関心を持ち、何をなすべきかを真剣に考え、行動しよう。

新幹線総合車両センター支部の実践に学ぶ!

「18春闘での失敗」と「感謝の気持ち」を忘れず、仲間と共に「信頼」に向き合います!

仙台地本・新幹線総合車両センター支部(幹総支部)では、過半数代表選での選出をはじめ、現業機関初の「休業」に対するたたかいかや新規加入をかち取るなど、職場活動が丁寧に行われ、大きな成果を生み出しています。その実践を、幹総支部・綿貫執行委員長、渡部書記長、仙台地本・尾形書記長から学んでみました。

※取材は3月13日に行いました。

支部執行委員長となった経緯をお聞かせ下さい。

入社し、労働条件の良い職場環境と感じましたが、それはJR東労組の先輩方がつくってきたものだと知りました。平和運動にも興味があってJR東労組に加入し、青年部、地本、支部書記長を経験後、2016年から支部執行委員長になり、その時に渡部さんも書記長となりました。

18春闘当時の様子をお聞かせ下さい。

仙台地本の地方委員会に本部の吉川委員長(当時)が来て、「脱退した人は組織破壊者と挨拶しましたが、キツイ言い方だと感じました。それで私は「脱退した人を組織破壊者と規定したが、そうさせたのは私たち。脱退した人に戻ってもらえる、戻ってきたいと思えるJR東労組をつくらねば」と発言しました。中には「幹総支部に不満はないし、居心地も良い。しかし…」と泣きながら脱退する組合員もいます。そのような仲間を組織破壊者と呼べません。



▲奥から幹総支部綿貫執行委員長、渡部書記長、仙台地本・尾形書記長(右端は聞き手の久能中央執行委員)

「今のJR東労組に不満があると感じたら(脱退して)外から見ても、信頼できると思ったり戻ってきて下さい。信頼できる組織をもう一度つくるために頑張ります」と絶対話ししました。脱退した仲間を色眼鏡でみただけは一度もなく、脱退後も「そろそろ戻っても良いんじゃないか?」と言える関係をつくっています。そのような4年前があったら、過半数代表選の勝利につながっています。

今回の過半数代表選勝利の要因は?

選挙期間が決まると「私、入れますから」と未加入、他労組の社員から声をかけられることが昨年度と比較し圧倒的に増えました。組合員や役員が日頃から対話し、他労組にも認めてほしいという結果です。感謝しかありません。

大きいのは、JR東労組を辞めたけれども信頼してくれる仲間が存在です。2018・2019年は、決選投票の上で選ばれました。一方、2020年は組合員の減少や一部管理者の不当労働行為と思われる事象もあり、社友会が代表となりました。そこで2021年は反省や教訓を踏まえ、言っていることとやっていることが違う、という社友会の姿勢に反発する声を掴み、「社友会ではなく、労働組合としてモノ言える職場を」と呼びかけました。他労組とも共闘し、過半数代表者として選んでいただきました。

安全衛生委員会での議論とは?

労災対策や、コロナ禍での自宅待機、感染防止策など幅広く議論しました。組合員や未加入の方から持ち込まれた議題は、必ず本人に戻しています。「安衛の議論があったから改善された」と実感いただいたことで、未加入の方ともよく話すようになりました。

現業機関初の「休業」に対してどう向き合いましたか。

これはかなりの悩みました。組合員・社員に不利益があったらならないと考え、本部・本社間の交渉議事録を読み込んだ上で、過半数代表として新幹線統括本部と雇用調整助成金の締結に向けた意見聴取に臨みました。日割り計算での減額がないことを確認し、意見聴取の場で「これならいける」と判断しました。そして、過半数代表としての聴取結果となるので、幹総の

全社員に議論した内容が伝わるようオフィシャルな情報手段として、コミュニケーションボードへの掲示と、職場のTeamsでの発信を行いました。

社員が不安に感じることがあることを、不安が現実になる前に議論できたことは良かったです。「一般的な休業手当の計算では、100分の100だけど減額になる」という認識が伝わっていなかったのので、丁寧に議論しました。「雇用」に手を付けるための地ならしでは、「という声もありましたが、それも「ない」ことを明確に確認しました。

新規加入についてもお聞かせ下さい。

「加入してくれ」とはあまの言わず、「どの部分に不安があるか」を丁寧に聞き、デメリットも返しました。「新規加入は自立すること」「会社は組合加入を自由と言うが、実際には様々なことが考えられること」「その時は全力で守ること」を伝えました。最終的には、先輩の助言や役員の姿勢、社友会にいても違和感がないことに踏まえ、加入を決意してくれました。1対1だけではなく、若手みんなで関わっています。昇進試験についても、JR東労組役員でも18春闘以降に主務職や主任職に合格していることを伝え、不安を解消しました。

各地の仲間へメッセージをお聞かせ下さい。

「先輩方が国鉄改革を経つてつくれたJR東労組を私の代で壊し、自分達の間で脱退させるを得ない人をつくってしまっただから以前のような、皆が集う、楽しい支部に戻したい」という思いで取り組んできました。18春闘当時は各地本とも悩みながら、正解と思う道をたどってきました。「思っていることを言わないと後悔する」「上からの押し付けではなく、丁寧に聞いて丁寧に返す」というのが教訓です。各職場で状況は異なりますが、18春闘の失敗と、組合員に対する感謝の気持ちを忘れてはいけません。過半数代表選は、幹総支部への信頼と、社友会では良くないという意思表示です。選んでいただいた方々には感謝しかありません。信頼に丁寧に向き合っていきます。

